

都市と雑木林

都市が膨張するなかで、雑木林は、猛烈な勢いで減少した。散策できる身近な林が、都市のなかにもつこうあつていい筈。これまでの流れを変える、新しい取り組みが必要だろつ。

雑木林の移り変わり

瀬田 雑木林の定義はなかなか難しいのですが、「薪炭林」としてとらえると、昭和二五、六年というところがピークで、そのころには約八〇〇万ヘクタール、森林の三分の一が薪炭林といわれていました。

菅野さんは横浜にずっとお住まいで、身のまわりから雑木林がどんな形で減ってきたのかを、実感としてとらえておられるのではないのでしょうか。

菅野 目に見える範囲のことしかわかりませんが、非常に勢いで減っているのは事実です。私が五〇年近く住んできました横浜市港北区では、統計でも昭和四四年を境に雑木林を主とする山林面積が、一挙にそれ以前の五

足田 輝一	ナチュラリスト
菅野 徹	ナチュラリスト
田村 明	法政大学教授・本誌編集委員
瀬田 信哉	環境庁計画課長・本誌編集委員



菅野 徹さん

分の一に減りました。

都市の雑木林には宅地化という定めがついてまわりますが、雑木林全体の薪炭林としての運命は、木炭生産量によく現れています。戦前の水準は二〇〇万トンですが、プロパンに押され、新幹線の開通と東京オリンピックの前の年にあたる昭和三八年には九〇万トンに落ち、その後は雪崩状の減少です。そのころからでしょう、雑木林が歴史上はじめて経済価値を失って、放置されるようになったのは。

私は旧制中学のときから近くの林を徘徊していますが、そのころの雑木林はひよつとすると明治時代のそれとあまり違っていません。独歩や蘆花の作品にみる明治中葉の武蔵野の雑木林とそっくりでした。この経済価値に裏打ちされた状態が、東京オリンピックのころまでつづいたのだと思います。あのころは雑木林にとっても、大きな節目でした。瀬田 足田さんも首都近郊をずいぶんお歩きになつていて、菅野さんが今

おつしやつたようにお感じてしまうか。

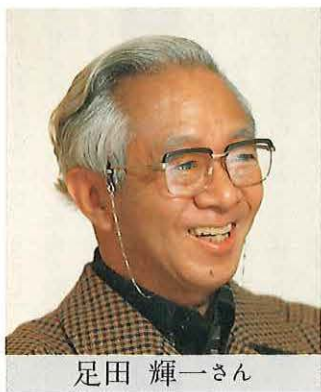
足田 私が歩き始めたころは、石油ショックの直後でしたから、いろんな開発計画がストップしてたんですね。多摩丘陵でも、土地が私鉄やその他の開発業者に相当買い占められていたけれども、それがそのまま手つかずに残っていたから、今おつしやつたように、独歩とか蘆花の見たのと同じような風景がそのころはまだあつたんですね。

ところが最近になって、再び開発の波が進行し始めたように感じるんです。これから一〇年ぐらいたら、僕らが親しんでいた林がだいぶ消えそうだというふうに感じますね。

瀬田 都市開発というなかで、雑木林のような都市近郊に残されていた林に対して、行政はどう対処をしてきたのでしょうか。

田村 雑木林がなぜなくなつてしまつたかというのは、大きく言えば都市化の波とエネルギー革命、この二つだと思います。

都市化については行政の前に、まず



足田 輝一さん

民間側が宅地をふやさなければいけないというときにどこをねらうかということ。それは、山林なんですね。農地改革の対象外であったために農地と違って山林には規制がないし、地主もまとまっていて土地が非常に買いやすいわけです。さらに、ブルドーザーなど土木機械が大変に発達したので、昔はちよつと手がつかなかったものが簡単に手がつく。

一方で、私が役所（横浜市）に入った時代は、約二〇〇万人の人口が純増加で毎年一〇万人、年間五パーセントふえていた。

ドイツの人が来て、一パーセントを超えなんていうことは、もう都市ではないと言う。彼らの考えている都市はちゃんと構築していくものなのだから、五パーセントというのは、都市の構築ができるわけがないのです。だから、それを放置していた現状を一言で言えば、行政は何もしていなかったということでしょう。

そうしたなかでも、私は土地全体に対する開発をもう少し秩序あるものにするための工夫をしたり、保全林という形で買収したり、また「市民の森方式」といって、地主さんと契約を結んで、市民にも開放して、これを保全してもらおうという方式を導入しました。

開発に関する法令や要綱も厳密に解釈をして適用しますと、なかなか開発しにくくなる。そういう手法も使って事実上抑えるということをやりましたね。



瀬田 信哉さん

瀬田 大都市周辺では、雑木林などの林がただ土地として見られるわけですが、それまで連続とつづいてきた人と雑木林の関係が消えて、すつと工業化社会にのみ込まれてしまったように思っています。

足田 ただ、そうした状況のなかでも、最近また有機農業なんていう要求が出てきて、肥料にするために下草を刈ったり、落ち葉を集めたり、手入れが行き届いてきたという傾向が一つありますね。もちろん今は燃料にはなりませんけれども、そういう利用法が一つある。

もう一つは、このごろシイタケ栽培が盛んで、その櫛木をとるためにクヌギとかコナラを管理している。そういうふうな利用法が若干出てきた。

こうした経済的な面だけでなく、もう一つ面白いことがあります。雑木林を歩いていて発見したのですが、小さい祠が方々に残っているんです。みんな朽ち果てて、もうなくなっちゃいそうなのだけでも、賽銭があげてあったり、しめ縄が年に一回取りかえてあったり、雑木林、この場合は雑木

山というような里山が、一つの信仰対象として残っている。

菅野 祠はありますね。小さくて、

◆雑木林の生きものたち

瀬田 誰も気付かない祠を発見されるくらいですから、季節ごとの動物や植物はもちろんたくさん見ておられると思いますが……。

足田 まず感じるのは、私が子供のころに親しんだ神戸の六甲山などよりも、植物の種類も、昆虫の種類も圧倒的に豊富だということですね。

ご承知のように、関西の二次林は松林が多くて、植物相もわりに単純ですから。

それと、象徴的なのはカタクリでしょう。カタクリが武蔵野の雑木林の運命を象徴しているように思っています。東京の区部でもカタクリの群生地がまだ残っていますが、まわりは住宅に囲まれた小さい雑木林があるだけで、風景としてはちよつと物足りない。

田村 私の場合、子供のころは身近なところに雑木林はほとんどなかったんです。むしろ「ぞうきばやし」という音がよくて、非常に優しい感じを受けていました。あとから雑木林という言葉を見て、まさに「ぞつぽくりん」で、ちよつとイメージダウンしてね。

雑木林の本当の姿に接したのは、戦後になってからです。関東の北の方から東北へ旅行したときに、林が一斉に花が咲いたように見えて、本当に花かと思ひましたね。そうすると、一緒に

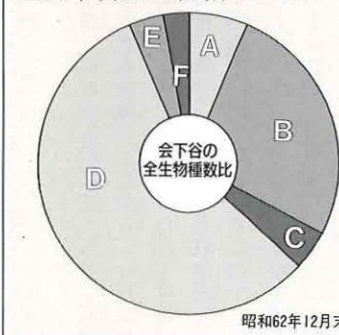
忘れられたようにひっそりしていても、正月には、新しいしめ縄が張ってあったりして、何やらゆかしいものです。

いたおふくろが、あれが雑木林なんだと。ああ、これがそうだったのか。やっぱり名前のおりすばらしいと思っただのを鮮烈に覚えていますよ。

それから、三年前ですが、雑木林のなかのカタクリの花を見に行ったことがあります。

多摩の五日市の奥の方にいる方が招いてくれて、おふくろを連れて行っただけです。可憐なカタクリの花がいっぱい咲いているのをゆつくりと見たのははじめてでした。その翌年におふくろ

■会下谷の生物相 (菅野 徹)



昭和62年12月末日現在

項目名	種数	%
A キノコ	90	6.3
B 一般植物	382	26.5
C フモコ類	60	4.2
D 昆虫	813	56.5
E 鳥	56	3.9
F 扇形動物	3	0.2
軟体動物	13	0.9
甲殻類など	12	0.8
両棲爬虫類	9	0.6
哺乳類	2	0.1
合計値	1440	100.0

は亡くなってしまったので、私にとつて大変思い出深いんです。

瀬田 雑木林は親孝行の仕上げという感じですね。

田村 そうそう。最初の東北の旅行というところから、一番最後が五日市の奥のカタクリというわけで。

瀬田 関西に比べれば関東の雑木林の方が昆虫相はかなり豊かだと、足田さんが先ほどおっしゃっていました。菅野さんはそれを四〇年来調べてこられた。

菅野 加えてここ一〇年余りは、一つの林をほぼ毎日歩いていきます。しかしその間にも、林は開発で痩せ細り、今では一回りするのに一〇分もかからない小ささです。しかしこの一〇年ほ

◆これからの雑木林

瀬田 ヨーロッパの都市近郊には、大きな森があちこちにありますが、樹種も日本の雑木林と同様で、明るい落葉広葉樹林が多いんですね。

田村 都市の近郊にあるという意味では同じかもしれませんが、中身は相当違うわけです。



田村 明さん

どの間にこの林で、鳥五六種など一四四〇種の動植物を見ました。ほかに名前のわからないものが五、六百種はあります。この林は小さいだけでなく、水場もろくにない平凡な、むしろみずばらしい雑木林です。生態系の保たれる最小サイズの林でしょう。それでもこれだけです。

同様な調査例がほかにありません、断言はできませんが、武蔵野のどの雑木林にも約二〇〇〇種の生物がいると見ていいでしょう。雑木林は、いわば自然の多様性の見本市、今風に言えば、遺伝子の宝庫です。単位面積あたりの種数でも、雑木林、すなわち落葉広葉樹林の豊かさは、岩礁海岸の潮間帯に次いで、日本第二位でしょう。

我々はすごい森が残っているなと思うのだけれども、実はそれは、都市化の波や産業革命のなかでかなり失われてしまったものを一〇〇年くらいかけて、保全し、回復してきた結果なんです。

ストックホルムへ行きますと、市庁舎の一角に銅版画があるんです。これは、都市近郊の土地を買収するという決議の模様を描いたものです。銅版画に残すぐらいだから、きつと大議論があったでしょうが、とにかくそのころからずうっと土地を買っている。現在では約三分の二、約七割は市が土地を持ってしまっているわけです。失われつつあるものを、大議論をし

て、大決心によって八、九〇年前に都市の緑を確保している。

ドイツの都市でもそうで、そのなかでも私が一番感心するのは、第一次大戦のあとに土地を買い、さらに、第二次大戦のあとでも買ったということですね。ドイツはもちろん敗戦国ですから、日本と同様ひどい状況で、財政的には大変厳しかった筈です。しかし、貴族などのたくさん土地を持った人が放出する土地をとにかく買った。

日本の場合、終戦後にはまずそういうことは考えなかった。その差はあまりにも大きいですね。そして、その差が結局、高度成長時代になってもそのまま、緑は都市化の波に簡単にのみ込まれてしまった。

瀬田 今のお話をうかがっていると、都市が市民のために森を引きもどしたという感じがします。日本は、都市が森を食いつぶしてしまつた。

菅野 雑木林に市民権を与えること、都市にとって雑木林もまた大切な市民であるという一般的な認知が必要でしょう。私には、調査中の林を守ろうと精一杯開発阻止運動をして、失敗した経験があります。ですから非常に悲観的です。しかし、少しでも多くの人々が雑木林の真の姿、その魅力を知る日が来ればあるいは、とも思います。

足田 これからのことについては、基本的には、私も相当悲観的なのですけど、打つ手はいくつかあるでしょう。

◆雑木林を歩く

田村 とにかく持っている人はお金に見えているわけで、まわりの人の方が、まだ緑に見えていると思います。だから、結局、都市全体として支える以外にあり得ないと思うのですよ。

長期的な政策をどこかできちんと、誰かがしておかなければいけない。環境庁や建設省、国土庁などもそうでしょうが、地元の自治体が頑張つてやるのが一つの大変有力な手段で、やり方によってはかなりのことができるのです。

法の解釈にしても、相当の幅があるわけだから、過半の市民が支持しているのだつたら、行政もかなり強いことがやれるし、さらに首長の姿勢によって相当なことができるんですよ。

しかし現状では、どうも市民の発言がまだ弱いのではないかなと思います。どこかでそれを変えていかなければいけないのではないのでしょうか。

瀬田 菅野さんなり、足田さんなりにも、エッセイなり、あるいはいろいろなデータを使って発言していただく。それが行政にも伝わり、行政が無視し得ない状況になっていくということが、大事ですね。

田村 自治体は、文字どおり市民全体のものなので、何を選択するかという議論をきちんとすることも必要だと思ふんです。

「マムシがいる、入るな」なんていう立て札があつたりして、大人が規制している面もあると思ふんですが、まず、

とにかく子供たちに雑木林のなかで遊んでもらいたい。

写真を撮っていると、団地の子供と出会うこともあります。子供たちに「モミジイチゴは酸っぱいけれども、おいしいんだよ」なんて言っても、子供たちは「えっ、そんなの食べられるの」と言っても、知らないんですね。子供が木登りをして遊んでいる姿を見かけたこともないし、要するに、雑木林はまわりにあるけれども、そこは入れないところだと思っている。

雑木林の近くで暮らしていて、そこで自然から学ぶということがあったら、その子供たちが大きくなったときに、雑木林に対する政治とか、そういうものもだんだん変わってくるところがあるのではないかと。

そういう意味で、雑木林が子供たちの天地になればと思うんです。

菅野 雑木林の魅力は、落ち葉をさくさくと踏んで歩くことに尽きまじょうか。そして、頭上に木々の枝が交錯することも。つまり、林のなかにすっぽり包まれる。すっぽり包まれて、なかに座っていられる。ところが、今残っている雑木林はその大半が、雑木林なれした私でさえ入れない林になっています。下草刈りがされていませんので、必死の藪漕ぎをしないと入れない。小道などをつけて、人が入れるようにしなければ、雑木林は次第に、近くで遠い存在になり、一層うとまれていくでしょう。

瀬田 ただ緑地として、緑を何パー

セント確保しているなどというのではなくて、やっぱり雑木林には入りたくない。雑木林は遠くに置いておくものではなくて、なかに入る林なのではないか。

ヒュツテ・ ふらんどる

煤孫 健司

夏期は山、冬期は東京という暮らしを始めて一五年が過ぎました。中学のころからハイキングを始め、スキー、スケート、キャンプを通じて自然と親しむようになり、高校を卒業するころには定宿の山小舎に居候を決め込んだりするようになっていました。当時、新宿に生まれ育った私は、東京に住むのがあたり前のことだと考えていましたが、あるとき、ふつと、こんなに自然に慣れ親しみ、好きなのだから山に住むことを考えても良いのじゃないかと思いついたのでした。

大学を一年で中退し、山小舎へアルバイトで入り、半年暮らしました。その後、住む場所を探すと、資金を貯めるために東京へもどって就職し、休日には小舎の建てられそうな場所を求めて各地を歩きました。

そのなかを散策して楽しめるというところでないと、保全していこうという力も落ちるかも知れませんが、

足田 雑木林が公園のような形で残るとしても、そこに生活の影がなくて、ただそれが標本的に残って、親しめな

した。こんなにも山間の奥地なのに平坦な土地が開け、空が明るく大きく開けている。まさに私にとっては桃源境へ辿り着いた感じがしました。五年間を予定していた職も三年目を前に息切れして辞し、入山しました。

鷹の巣はかつて、西丸震哉氏が著書に「日本にもまだ原始人が残っていた」と記した場所です。尾瀬の北側に位置し、幻の名山と渾名された平ヶ岳の登山基地でもあります。生鮮食糧品を買うには車で片道三時間半。その道路はカーブ、悪路、急坂の連続。もちろん片側は崖。タイヤはパンクする。オイルタンクや車の床には穴があく。沢をザンブと渡ればブレーキは効かなくなる。ちよつと夕立が降れば土砂崩れ。台風のすさまじさ、集中豪雨、雪溶けの増水、春の雪崩。道路の崩壊で半年の間に一カ月しか通れない年もありました。

このような土地だけに、自然は本来の姿を保っています。おおらかで質朴な大自然です。うらやかでやさしい春の咲く春。のんびりしたゆたう時の流れの日々。夏にはホタルやトンボが無数に飛び交い、紅葉の素晴らしさには、ただただ茫然とするだけ。匂い、ゆるゆる十日毎に微妙に変化してゆく季節の推移を体験すること、日本の四季の見事さにはんとうに感銘しました。

最初の建物は翌年の春、豪雨のために

いものになってしまつては、意味がないでしょう。

瀬田 悲観的ななかでも、何とか一つ踏ん張ろうという気持ちで、市民も行政も持たなければならぬですね。

倒壊。そう、鷹の巣は日本でも有数の豪雪地なのです。積雪時には最高七メートルに達します。そのために冬は無人の集落と化します。その後、二年がかりで小舎を建てました。その冬、アルバイト先のスキー場で知り合った女房と春には祝言をあげ、山ははじめてという女房と入山。ヒュツテ・ふらんどるの営業開始の看板をさげました。最初の年の客数、四八名。

尾瀬や平ヶ岳に遊び、山菜採りに熱中し、イワナ釣りに興じ、裏の湿地から堀りあげた粘土で遊ぶ。花壇や畑を作るために土をほじくり返す。土のなくなつてしまつた新宿から山に来て、この五年の間、ずうつと土いじりをしてきました。土いじりは、本当におもしろい。いじればいじるほどに美しい花を、美味しい野菜を私たちにもたらしてくれる。三年後には娘も生まれ、親子ともども健康です。

この間、道路が舗装になり町も近くなりました。電気も昨年入りました。でもランプはそのまま使用します。山小舎にはランプが似合っています。星を見る会の人たちは集落が明るくなると星が見えにくくなると心配していましたが、安心してください。今までは自家発電でしたが、メーターに切り換わつてからは必要な箇所しかつけないので、集落の明りは、むしろ暗くなりました。

